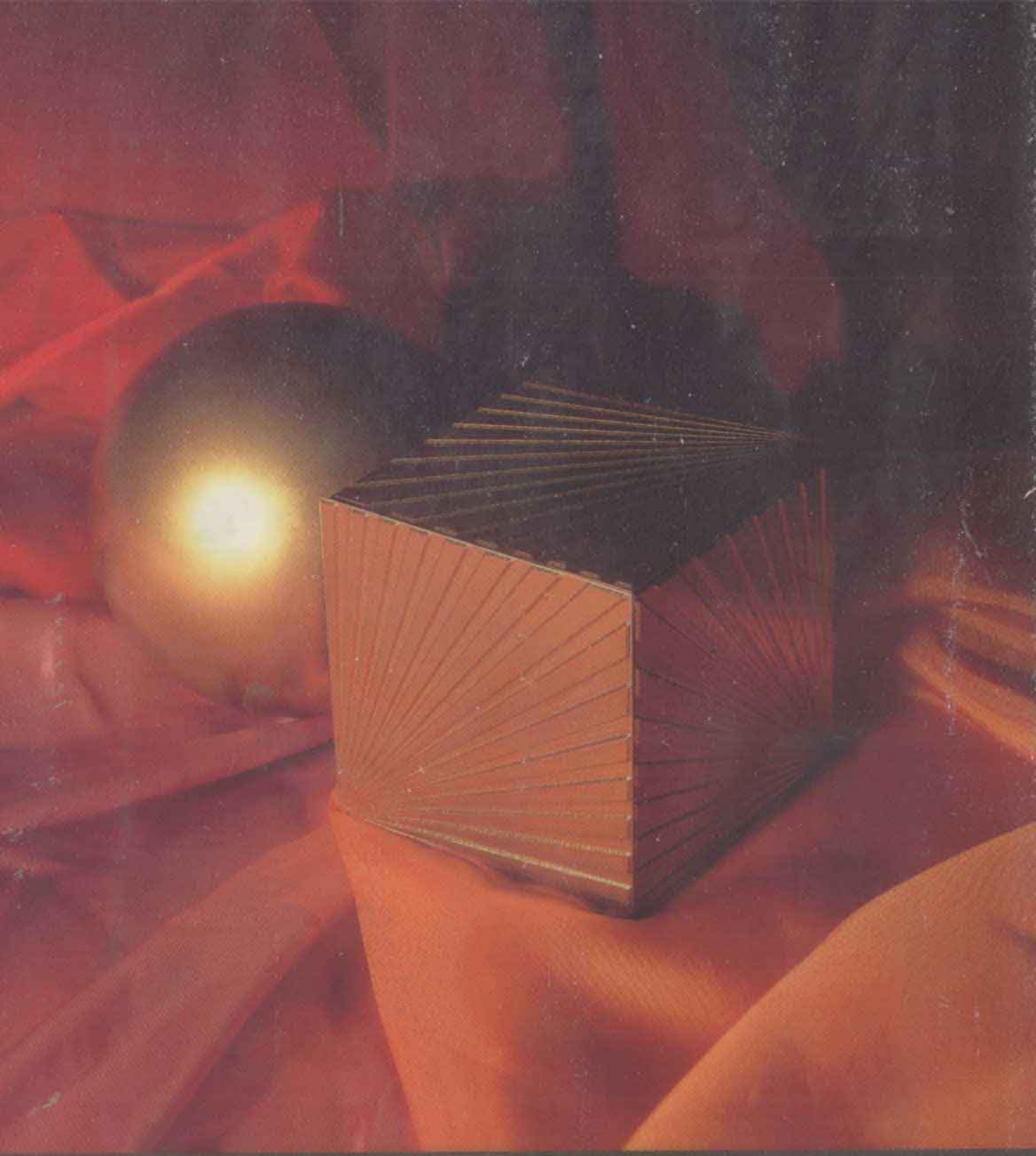

KAPPA NOVELS

長編推理小説 書下ろし

鳴風荘事件

——殺人方程式II——

綾辻行人

KOBUNS

お願い——

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけましたら、ありがたく存じます。

なお、「カッパ・ノベルス」にかぎらず、最近、どんな小説を読まれたでしょうか。また、今後、どんな小説をお読みになりたいでしょうか。読みたい作家の名前もお書きくわえいただけませんか。

どの本にも一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば幸せに存じます。

東京都文京区音羽二—一二—一三
(〒112-11)
光文社「カッパ・ノベルス」編集部

長編推理小説　鳴風荘事件（めいふうそう）

1995年5月25日　初版1刷発行
1995年5月30日　　2刷発行

著者　綾辻行人（あやつじゆきと）

発行者　森元順司

印刷者　佐々木明
東京都文京区後楽2-18-8
公和図書

発行所　東京都文京区音羽2
振替00160-3-115347
株式会社　光文社
電話　東京(3942)2241(代)

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。(ナショナル製本)
表紙の模様・意匠登録 116613
© Yukito Ayatsuji 1995
ISBN4-334-07135-X
Printed in Japan

Ⓡ本書の全部または一部を無断で複写複製(コピー)することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター(03-3401-2382)にご連絡ください。

長編推理小説・書下ろし

鳴風荘事件

——殺人方程式II——

綾辻行人

カッパ・ノベルス

—TとPに—

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

鳴風荘事件　目次

プロローグ……7
Ⅰ　月蝕の夜、二人は出会った……8
DATA(1)……24
Ⅱ　十年前の約束が語られる……26
DATA(2)……37
Ⅲ　双子は入れ替わるものである……38
DATA(3)……53
Ⅳ　旧友たちと再会する……54
DATA(4)……87
Ⅴ　鳴風荘に到着する……89
DATA(5)……113
Ⅵ　鳴風荘の夜は更ける……117
インターローグ……141

Ⅶ またしても死体の髪が切られている……142
DATA(6)……162
Ⅷ 本物の刑事たちが登場する……163
DATA(7)……195
Ⅸ 問題点が検討される……198
DATA(8)……227
Ⅹ 密室と呼ぶには屋根がない……229
DATA(9)……265
ではここで、謹(つつし)んで読者の注意を喚起する……266
Ⅺ 犯人が指摘される……268
Ⅻ 時を遡(さかのぼ)る……312
エピローグ……328
あとがき……331

プロローグ

「どうしようもない」
女は冷たく云った。腰よりも長く伸ばした見事な黒髪が、まるでそれ自体が生を持つものであるかのように妖しく揺れ動く。
「可哀想だけど、私にはどうしようもないの。ただ分かってしまうだけ、見えてしまうだけ。あなたの身の破滅が」
……この女のせいで。
絶望に打ちひしがれ、彼は唇を噛みしめた。
この女の、この忌まわしい黒髪のせいで……。
理性が吹き飛んだ。巨大な狂気に呑まれた。
怒りと、それよりもずっと激しい恐れに衝き動かされる自らを、もはや止めることができなかった。
テーブルの上にあった鋏をとっさに手に取ると、すいと背を向けて窓の方へ進む女めがけ、彼は躍りかかっていった。
……
……
……俯せに倒れ、動かなくなった女のそばに屈み込む。逡巡する間もなく、彼は鋏を握り直した。

I　月蝕の夜、二人は出会った

1

一九八二年十二月三十日、木曜日の夜だった。
風はなく、雲の影もない。首都圏にしては珍しいくらい澄んだ真冬の夜空に、いつになく妖しい風情で光る満月の下――。
誰かがあそこに立っている。
建物の最上階に造られた、広々としたルーフ・バルコニー。その端に立って、じっと空を見上げている……。
明日香井叶がその人影に気づいたのは、偶然と云えばまったく偶然のことだった。
時刻は午後七時過ぎ。場所は世田谷区代田。叶が東京での住処としている、独身者向け賃貸マンションの屋上である。
叶が入居しているのは、四階建てのこのマンションの二階の一室だった。ありあわせのインスタント食品で夕食を済ませたあと、天体観測用の高倍率双眼鏡を携えていそいそと屋上に昇ってきたのが、つい先ほどのこと。
月の位置を確かめつつ、専用の三脚に双眼鏡を取り付けようとした、その時だった。ふと視線を移した先に、たまたまその人影を見つけたのだ。
こちらの古びた安普請な建物に比べ、あちらのマンションはまだ新しい、なおかついかにも高級そうなたたずまいであった。何度か前を通りがかったこともある。確か《ヴィニータコータ》とかいう、何だかよく意味の分からない片仮名名前だったと思う。広い敷地に建てられた六階建ての、あちらは最上階

の部屋だけれど、土地がいくぶん傾斜しているため、こちらの屋上と問題のバルコニーとはほぼ同じ高さにある。

いくつもの建物や道路を挟んで、直線距離はたぶん何百メートルかあるだろう。肉眼だと、バルコニーの人影は文字どおり「影」にしか見えない。片手をフェンスの手すりにかけて空を仰いでいる姿勢がかろうじて認められるくらいで、服装はもちろん男女の別も分からなかった。

この寒い中、バルコニーに出て何をしているんだろう。今頃、洗濯物の出し入れを？　いや、そんな様子はない。では単に外の空気を吸うため？　あるいは、ひょっとして同好の士だったりして……。

そんなふうに思いを巡らせながら、叶は双眼鏡のレンズをその人影へと向けた。

むろん叶は、そのような行為を本来の目的として高性能の双眼鏡を所持しているわけではない。今夜ここにやって来たのは、普段は見ることのできない特殊な天体現象を楽しむためだった。

一九八二年十二月三十日。今夜はこれから、太陽と地球と月がちょうど一直線に並び、月面を照らす太陽光を地球が遮ってしまう。つまりは月蝕の夜なのである。

二十倍に拡大された視野に、問題のバルコニーが映る。

降り注ぐ月光と部屋のガラス戸から洩れ出す光のおかげで、存外にはっきりと、思わずどきっとしてしまうほど間近に、そこに立つその人物の姿が見えた。

女性だ。それも若く美しい――。

黒い服に、薄緑色のショールを羽織っている。喉許に覗いているあの黄色いものは、スカーフか何かだろうか。腰よりも長く伸ばした黒髪が、何よりまず印象的だった。

思わず息を殺して見守るうち、女はおもむろに手すりから手を離し、もう片方の手と合わせて自分の

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

胸に当てた。その姿勢でまた空を振り仰ぐ。
柔らかな月光を浴びて揺れる長い髪。青白く浮かび上がった美しい顔……。
月に祈りを捧げる巫女、とでもいった不思議な雰囲気を何となく感じて、叶の心はざわめいた。
「こらこら」
と呟いて細かく瞬きをし、このまま彼女の様子を見ていたいという誘惑に抵抗する。
「何しに来たんだ、お前」
本来の目的を忘れてはいけない。飲み会の誘いを断わり、見たいテレビの年末特番を諦めて、こうして屋上まで昇ってきたというのに。
双眼鏡から目を離すと、静かに息をつきながら夜空を見上げる。すでに円い月の左端が暗くなっていた。蝕が始まっているのだ。
明日香井叶、当時二十一歳。
故郷の札幌を離れ、東京に出てきて三年近くになる。M＊＊大学理工学部に籍を置く、ごく平凡な学生であった。
子供の頃から星を見るのが好きだった。いずれは天文学者になりたいと夢見てもいたのだが、それは何年か前までのこと。学者になれるほどの素質は自分にはないと早々に見切りをつけ、来年はとりあえず、教員採用試験でも受けてみようかなと考えている。札幌でいくつかの会社を切りまわしている父親は、帰ってきて手伝いをしろとうるさいが、今のところそんな気はない。学者に向いていない以上に、自分は実業家には向いていないと思うのである。
三脚に双眼鏡を取り付け、叶は「本来の目的」へと立ち戻る。
今夜の月蝕は皆既蝕だった。これから暗い部分がどんどんと広がっていって、午後八時前には皆既が始まる。
ひとしきり月の動きを追いかけると、叶はブルゾンのポケットから缶コーヒーを取り出した。ここへ上がってくる直前に自動販売機で買ったものだが、

すっかり冷たくなってしまっている。
一口飲んで、思わずぶるりと身を震わせる。さすがに冷える。風のないのがまだしも救いだった。
かじかんだ手に息を吐きかけながら、ちらりと先ほどのマンションの方に目をやる。バルコニーに立つ人影は、もうなかった。
（まあ、そりゃあそうだよな）
他の季節ならともかく、真冬のこの寒さの中、何十分間もバルコニーに出て月を見ている人間はそうそういないだろう。少なくとも彼女は「同好の士」ではなかったということだ。月に祈りを捧げる巫女――それもまた、少々ロマンティックにすぎる叶の幻想だったということか。
八時二十八分。蝕が最大となる。
すっぽりと地球の影に入った月は、赤銅色に鈍く光る円として捉えられる。地球の大気を通過して屈折した太陽光が月面に届くため、完全には輝きを失ってしまわないのである。
夜空に暗く浮かんだ異形の月。寒さも忘れてその妖しい表情を見つづけるうちに、ふと――。
この夜のどこかに何かしら異様な気配を感じて、叶ははっと息を止めた。
音として耳に聞こえたわけではない。像として目に映ったわけでもない。強いて云えば皮膚感覚に似た、けれども実際のところそれとはまた違う……。
不意に崩れた何かのバランス。激しく乱れた波の形。静かな水面に突然投げ込まれた小石。――何やらそのようなもの。
五感を超えた人間の知覚能力の存在を、叶はこれまで一度も実感したことがないし、信じたこともない。その見解を変えないとすれば、この時彼が感じたものは単なる気のせいで、折りしもこの同じ時にその事件が起こったという事実はまったくの偶然だったということになるわけだが、その如何はさておき――。
叶がそこで、とっさに例のマンションのバルコ

ニーに目を向けたのは、先ほどのあの女性のことがやはり心に引っかかっていたからであった。

六階のルーフ・バルコニーの奥に、明りの灯った部屋が見える。いくらかのためらいの後、叶は双眼鏡の向きを変えた。

バルコニーの奥の広いガラス戸。カーテンは引かれていない。その向こう、部屋の中にいる人間の姿が、焦点を合わせた円い視界に飛び込んできた。黒い服に黄色いスカーフ……間違いない。さっきのあの女だ。

長い髪を振り乱し、両手を前に突き出してこちらに向かってくる。大きく口を開けているのが分かった。何か叫んでいるのだ。

(ええっ?)

叶は身を硬くした。

(いったい何が……)

同じ部屋の中に、別の人間の姿が見えた。青い袖のスタジアム・ジャンパーを着ている。若い男のようだった。右手を振り上げながら、女のあとを追ってくる。そして——。

男の手には、銀色に光る何かが握られていた。それが女の身体めがけて勢い良く振り下ろされる。ガラス戸にへばりつくような格好で、女はさらに大きく口を開ける。そのままずるずると身を崩す。

(おいおい、冗談じゃないよ)

暴力は大の苦手だった。映画やテレビドラマでちょっと血腥い場面を見せられただけで、すぐに気分が悪くなってしまう叶だが、期せずして現実にそれを目撃してしまったのだからたまらない。動悸と冷や汗に加え、強い目眩に襲われて膝が折れそうになった。

どうしたらいい? 警察に連絡するか。それともすぐにあの部屋へ駆けつけるか。

わずかの時間でからからに渇いてしまった口と喉を、缶コーヒーの残りで潤す。それから叶は、双眼鏡と三脚をその場に放り出したまま、もつれる足で

階段へと向かった。
午後八時五十五分。そろそろ皆既が終わろうとしている時刻である。

2

何だか様子が変だ。何だか普通じゃない……。
ふっと夜空を見上げて、相澤深雪は驚いた。
あそこに浮かんだ、あれはいったい何だろう。光なのか影なのかよく分からないような、あの大きな円いものは。
（――月？）
そう気づいて、思わず目をしばたたく。
あれが月？　あんなに暗い、あんなに妙な色をした月なんか、これまで一度も見たことがない。まるでココア色のセロファンをかぶせたような。
さっきの店で飲んだワインのせいだろうか。あまりアルコールには強い方ではないのに、今夜はついついたくさん飲んでしまった。気分は決して悪くないのだけれど、足許の方はかなりふらついている。この酔いのせいで、月があんなふうに見えるのだろうか。
「ねえねえ、夕海ちゃん」
火照った頬に片手を当てながら、深雪は並んで歩いていた友人に声をかけた。
「ほらほら。何だか凄いよ」
「えっ？　何が」
「あれ。あの月の色」
深雪が示す空を見上げて、夕海は黒縁の眼鏡のフレームに指をかけた。そうしてぼそりと、
「本当だ」
「やっぱり変な色に見えるよね」
深雪が訊くと、夕海は小さく頷き、
「今夜は確か、月蝕だから」
と云った。
「月蝕？」

「今朝の新聞に、そう……」
「ナルホド。そっか。月蝕が起こってるのかぁ。あんなになっちゃうんだ、お月さま」
相澤深雪、当時十九歳。
今年の春、S＊＊女子大学の文学部に入学した。都内M市にある自宅から、片道一時間半をかけて通学している。
一方の夕海は姓を美島(みしま)といい、深雪とは中学と高校が一緒だった仲である。中学の時には同じ美術クラブのメンバーだった。同じクラスになったことも幾度かあって、わりあいに親しくしていた間柄なのだが、高校を卒業してからは一度も話をする機会がなかった。
その日、深雪が夕海と出会ったのは、下北沢(しもきたざわ)のとある小劇場で起こった偶然だった。知り合いが所属している劇団の年末公演を観(み)にいった、そこでたまたま彼女の姿を見つけたのである。
夕海に観劇の趣味があるとは知らなかったので、深雪はちょっと驚いた。深雪の方はもともと演劇好きで、特に大学に入ってからはちょくちょくそういった小劇場に足を運んでいたのだが。
ほぼ十カ月ぶりの友人との再会を深雪は単純に喜んだが、夕海の方は何となく戸惑っているふうだった。聞けば、大学の友人に誘われてチケットを買ったのだという。二人で来るはずだったのが、その友人は今日になって急に体調を崩し、来られなくなったらしい。
公演が終わると、深雪の方が誘って近くのレストランに入った。
小柄な深雪よりもいくらか上背のある夕海だが、着こなしのセンスの問題だろうか、実際以上にずんぐりとした体型に見える。化粧っけのない童顔にショート・ボブの赤味がかった髪、度の強そうな黒縁眼鏡。そんな、どちらかと云えば野暮(やぼ)ったい風貌(ふうぼう)も、あまり自信のなさそうな声でとつとつと言葉をつなげる喋(しゃべ)り方も、高校時代とほとんど変わると

ころがなかった。
「そう云えばさ、お姉さんのマンション、確かこの辺なんだよね」
深雪がその話題を持ち出したのは、ずいぶんとワインが入って気分が浮かれてきた頃のことだった。夕海はすると、「あ……」と小さく声を洩らし、
「どうして、それを」
「こないだ週刊誌で見たの」
と、深雪は答えた。
「巻頭のグラビアに取り上げられてて、そこに『世田谷区代田のマンションを仕事場にする』って書いてあったから」
「――そう」
夕海の反応は意外にそっけなかったが、深雪はその意味を深く考えることもなく言葉を続けた。
「凄い、すっかり有名人だよね、お姉さん。作家でイラストレイターであんなに美人で、そんでもって人の未来を予言しちゃう力があるんだって？」
「……」
「凄いなあ。あたしたちより七つ上だっけ」
夕海の姉、美島紗月の名が初めてマスコミに登場したのは三年ほど前のことである。某文芸誌の新人賞に投じた小説が入選し、ほぼ時期を同じくしてイラストレイターとしても活躍しはじめる。当時二十三歳の若き才媛は妖艶な雰囲気を持った美人で、それがさらに注目度を高めることとなった。
各々の分野で着実に優れた作品を発表して話題をさらう一方、彼女が持つと噂されるある種の〝不思議な力〟もまた、徐々に人々の注目を集めはじめていた。その〝力〟とはつまり、深雪が云ったような「人の未来を予言しちゃう力」である。占い師だの霊能者だのといった看板を上げてこそいないが、噂を伝え聞いて彼女を訪ねる人間はここのところめっきり増えてきているという。
その美島紗月が夕海の実の姉だということを、深雪は最近になってから知ったのだった。夕海に美人

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com